

# 良寛詩集系統序論（中）

——貫華系テキスト・流布本系テキストと『草堂詩集』との関係——

下 田 祐 輔

## はじめに

前稿<sup>(1)</sup>では、良寛詩集諸本の系統序列を探る端緒として、従来、然るべき位置づけがなされていない『草堂詩集』の、いわゆる天・地・人の各巻について、検討した。その結果、雑詩の集である天巻は、同じく雑詩の集である人巻に推敲が施された後に作られた可能性が高いこと、有題詩の集である地巻は、最終的には天巻と組み合わせられ、一つの詩集を構成するべきものであることが分かった。次に検討すべき課題は、この『草堂詩集』が、他の良寛詩集諸本との関わりにおいて、いかなる位置を占めるか、ということである。

さて、『草堂詩集』以外の、現存する良寛詩集諸本は、自筆・他筆合わせて多様であるが、これらを所収各詩篇のテキストの異同から見ると、二つのグループに分けることが出来る。

ひとつは、『(草堂集)貫華』・興善寺本『草堂集』（現在は山岸瘦石筆写本のみ伝存し、良寛自筆の原本は散佚したとみられる。）・『(仮題)小楷詩巻』という、三つの自筆稿本である。各本の間には若干の字句の相異が認められるが、その差異は、これら三本とそれ以外の諸本との間に見られる差異に比して極めて小さい。また、

詩篇の排列の仕方、『貫華』と興善寺本とが酷似し、『小楷詩巻』もそれらをかなり踏襲している。そこで、これを一つのグループとし、『貫華系テキスト』と呼ぶことにする。

もうひとつは、写本によって流布した、二通りの他撰の良寛詩集が伝えるテキストである。その一系は鈴木桐軒、文台兄弟及び桐軒の息順亭によって編集された詩集である。良寛自撰詩集と同じ「草堂集」の題を冠しているが、自撰詩集と区別するため、この系列の写本を△鈴木本▽と総称する。この鈴木本とは異なるもうひとつの系列の一群の写本がある。いわゆる「草庵集」の類である。この系列の写本には他に「良寛禪師詩集」「良寛尊者詩集」など、伝本毎にさまざまに異なった題が付けられているが、いずれも内容は同一である。そこで、これら△草庵本▽と総称する。編者は高岡亭翠柳とみられるが、編集のいきさつなど詳細は未詳である。

鈴木本と草庵本とは、詩篇の排列方法が大きく異なっているが、所収詩篇そのものは、一部の出入りはあるものの、ほぼ共通している。しかもそのテキストの異同もごく僅少であり、基本的に同一と認められる。そこで、この両系統のテキストを一括して「流布本系テキスト」と呼ぶことにする。鈴木本・草庵本双方のテキストが概

ね共通しているのは、各々の編者が底本として用いた良寛自筆詩集が同一である可能性を示唆するが、その自筆詩集自体は現所在未詳であり、その姿は二種の流布本を通して間接的に知られるのみである。以下の流布本系テキストの位置づけに際しては、当然のことながら、この流布本の底本たる良寛自筆詩集の存在を常に念頭に置きながら進めることとする。

まずは、前稿同様、作品の読みを介入させない数量的分析によって、諸本の位置づけの方向を探りたい。無論、この方法だけで充分とは思われないが、ここで見出だされる諸本の位置づけの方向は、今後のいくつもの異なった角度からの分析結果により、裏付けられてゆくことになろう。

以下、論述の便宜上、まず『草堂詩集』と流布本系テキストの比較検討を行うが、流布本そのものについては、統稿にて詳述したい。

#### 一 『草堂詩集』人・天・地巻と流布本テキストとの関係

『草堂詩集』と流布本とを対校すると、『草堂詩集』の字句改変箇所<sup>1</sup>に於ける改変前・改変後のいずれかの字句が、流布本と一致する場合が多い。そこで『草堂詩集』の字句の改変の状況を手がかりに、『草堂詩集』の各巻と流布本のテキストとの先後関係を探ってみよう。

なお、流布本系テキストを伝える鈴木本と草庵本の両系統では、詳細は統稿に譲るが、後者の方が、底本たる良寛自筆詩集のテキストをより忠実に伝えていると考えられる。そこで、現存草庵本の中で最も古い年次の記載のある『良寛禪師詩集』（新潟県巻町郷土資料館蔵）を以て流布本系テキストを代表させることとする。『良寛禪師

詩集』は、全収録作品数一七九首（有題詩の部七一首、雑詩の部一〇八首）。そのうち『草堂詩集』人巻（全五三首）と共通する詩篇は四六首、天巻（全一一一首）と共通する詩篇は九三首、地巻（六八首）と共通する詩篇は五五首である。『草堂詩集』各巻とも、所収詩篇の八割以上が『良寛禪師詩集』と共通していることになる。

『草堂詩集』各巻の字句改変箇所<sup>2</sup>に於ける『草堂詩集』の字句と流布本の字句との関係は以下のパターンに分けることができる。（右傍の字は書き込み字句、傍線は抹消符号、矢印は見かけの改案の方向を表す。）

e 『草堂詩集』の書き込み字句と流布本の字句とが一致する。

(例) 天6 宅辺有竹林<sup>ホ</sup> ↓ 流96 宅辺有苦竹

この場合、『草堂詩集』（天巻）の字句を改めたのちに、流布本テキストが成立したと判断される。

f 『草堂詩集』の本行字句（改変前）と流布本の字句とが一致する。

(例) 天3 藤纏老樹暗<sup>枯</sup> ↑ 流104 藤纏老樹暗

この場合はeとは逆に、流布本テキスト成立以降に、『草堂詩集』（天巻）の推敲がおこなわれたと判断される。

g 『草堂詩集』の改変箇所<sup>3</sup>に於けるいずれの字句も流布本の字句と一致しない。

(例) 天1 五音何能該<sup>屈</sup> 流72 五音誰能該

この場合、『草堂詩集』（天巻）と流布本系テキストとの関係は判然としない。

天巻（或は人巻）と流布本とに共通して収録する作品の各々について、右のe f gに該当する事象数を一字を単位として調査した。

結果を次に示す。個々の詩篇別の事象数は、紙面の都合上、割愛し、対象全詩篇についての各項目別の事象数の合計のみを掲げる。尚、eとfのケースについては、抹消符号の付され方によつては見かけの変更の順序が変わってくる場合があるため、前稿同様、一応四つのパターンに分けて事象数を集計した（前稿注11を参照されたい）。

地一流	天一流	人一流	e				計
			1	2	3	4	
216	378	76	1	2	3	4	96
162	276	51	0	0	0	25	
1	25	0					
0	0	0					
53	77	25					32
96	156	49	1	2	3	4	
32	65	28	2	2	2	17	
5	45	2					
7	12	2					56
52	34	17					
	131	13	g				

前稿の天巻と人巻との間に見られたような複雑な相異・一致の様相がここにも認められる。だが、やはり全体としては、一つの明確な傾向を示している。まず人巻について言うなら、全詩篇におけるe・fそれぞれの合計値を見ると、eの数がfのそれを大きく上回る。つまり人巻の字句改変箇所において、流布本系テキストの字句が、人巻の推敲後の字句と一致する割合が高い。eとは逆のfの事象が皆無ではないにしても、どちらかと言えば、人巻に推敲が施されたあとに、流布本系テキストが成立した可能性が高いと推測される。天巻について見ると、eの事象数がfのそれを上回る状況がさらに鮮明である。天巻の推敲後は、流布本系テキストに極めて近く

なっている。有題詩の部である地巻は、やはりeの事象数がfのそれを大きく上回っている。即ち、地巻の字句改変箇所において、改変前の字句より、改変後の字句の方が流布本テキストに一致する割合が高く、地巻の推敲後、流布本のテキストが作られた可能性が高いことが窺える。

如上の結果は、『草堂詩集』が書かれ、推敲されたのは、流布本系テキストの成立以前である可能性が高いことを示していると言えよう。このことを更に次の視点から補いたい。

前稿で知り得たのは、『草堂詩集』天巻と人巻とは、人巻が書かれ、推敲された後に天巻が書かれたという関係である。更に今、この二巻はいずれも、流布本系テキストに先立って書かれたものである可能性が強いことが分かった。簡略に図示すれば次の如くである。

人巻↓天巻↓流布本系テキスト

これらのことから、次のことが言えるはずである。厚く、流布本系テキストは、人巻よりも天巻により近いものである。

人巻——↓流布本系テキスト

天巻↓流布本系テキスト

果してその通りであるかどうかを確かめて見よう。テキストの近さを測る目安となるのは、テキストの字句の一致度である。流布本系テキストが人巻と天巻とのどちらと一致する度合いが高いかを測るには、人巻・天巻間の異同字句について、そのどちらが流布本系テキストと一致するかを見ればよい。それを調べた。但し字句改変箇所については除外し、各々の稿本に於いて改変されていない字句を対象とした。その結果はつぎの通りである。（事象数は一字を単位

とする。)

天巻と人巻との間の異同字句のうち、

天巻の方が流布本と一致する事象—— 267

人巻の方が流布本と一致する事象—— 70

即ち、人巻の方が流布本系テキストに遠く、天巻の方が流布本の字句に一致する傾向が高いことが分かる。つまり、流布本系テキストにより近いのは天巻の方であると言える。

以上から、『草堂詩集』が書かれ、推敲されたのちに、流布本系テキスト(流布本の底本となった良寛自筆詩集のテキスト)が成立したと考えられる。このことは次のこととも矛盾なく符合する。

流布本テキストは文化十二年春までには出来ているが、この頃良寛は長年暮らした五合庵を捨て、国上山麓の乙子神社の草庵に移り住んでいる。乙子期から島崎の木村元右衛門邸で臨終を迎えるに至るまでに作られたとされる遺墨は概して、流布本系テキストと最もよく一致するのである。今は詳しく述べ得ないが、例えば『没後百五十年良寛展図録』(毎日新聞社「九八〇年」図版「九四」)の「千峰「草堂」詩は、書風から乙子期の書とされている。この詩は第一・七・八句について、諸本間に大きな異同があるが、この遺墨のテキストは流布本テキストとほぼ同一なのである。

## 二 貫華系テキストの三稿本について

次に、貫華系テキストと『草堂詩集』とはいかなる関係にあるか、それを確かめる。

その前に、貫華系テキストの三つの伝本の概要について述べる。

現所蔵者	貫華	興善寺本(写本)	小楷詩巻
所収詩篇の形式	五・七言有題詩 五・七言雜詩	五・七言有題詩 五・七言雜詩	五言雜詩
作品数	未詳(*3)	一〇〇首	三六首
		小田原 山岸氏	鎌倉 黒田氏

\* 1 紙数については殆ど未詳であるため、省略する。

\* 2 作品数は、現存のものによる。これらはいずれも欠丁や、写本作成時の錯誤等によって、もともとあるべきはずの詩篇が欠落している可能性がある。

\* 3 東郷『良寛全集』には「百十七首」、須佐晋長『良寛詩註解』には「一一三首」とある。

『貫華』と興善寺本『草堂集』とは、いずれも、推敲のための字句の書き込みが施された草稿本である。両者は所収詩篇及びそのテキスト、さらにその排列に於いて、共通すること顯著であり、『貫華』を殆どそのまま書き写したものが興善寺本であるという印象すら受けるが、『貫華』は今のところ極く部分的に公開されているのみで、その全容を知り得ないため、両者の関係の詳細は明らかでない点が多い。いずれ機会を得て、補いたい。

『小楷詩巻』は前二者とは異なり、誤記の訂正のほかは推敲等の為の書き込みが全くなされていない。浄書本として書かれたとも考

えられる。所収詩篇数は三十六首と少ないが、現存の詩巻が完結した姿を呈しているかどうかは判断し難い。所収詩篇はほかの貫華系の伝本とはほぼ共通しており、排列は興善寺本と見較べると若干の出入りがあるが、概ね共通している。

詩集の構成について、同じ自撰詩集稿本である『草堂詩集』の各巻と比較してみよう。『草堂詩集』の場合、雑詩の集である人巻及び天巻は五言詩のみを収録し、有題詩の集である地巻に五言・七言の有題詩が収められている。つまり、七言詩は全て地巻に集められ、題が付されている。このように各巻ごとに、所収詩篇の形式は、題の有無、五・七言の別、という点で、それぞれ統一されている。そのうち天巻と地巻とが最終的には一組となり、自撰詩集『草堂詩集』を構成する。

ところが、『貫華』や興善寺本『草堂集』では、雑詩の部にも七言詩が混じる。この無題の七言詩は、地巻に於いては題が付されるものである。また、有題詩は一応まとめて排列されてはいるが、雑詩の部の前に数首並べられるほか、詩集の巻末にも十数首ほど書き連ねられている。このように、『草堂詩集』に於ける如き詩篇の形式上の統一が『貫華』や興善寺本では不徹底である。

### 三 『草堂詩集』人・天・地巻と興善寺本『草堂集』との関係

『貫華』については、流布本とは字句が顯著に異なることが早くから指摘され、初期の稿本とする位置づけもなされてきた<sup>(9)</sup>。だが、『草堂詩集』との関わりから論じられたことはない。そこで次に、貫華系テキストが『草堂詩集』の各巻のテキストと如何なる関係にあるかを検討したい。なお、貫華系テキスト三本のなかで、質・量

ともに最善本というべきは、自筆の原本が現存する『貫華』であるが、先に述べた理由から、その全容を知り得ないので、とりあえずは興善寺本『草堂集』（山崖瘦石筆写本）を以下の検討の対象とする。

興善寺本には、『草堂詩集』の各巻ほど多くはないが、推敲の際の字句の書き込みがなされている。そこで、ここでもまず、こうした書き込み字句が各稿本間でどのような関係にあるかを見ていくこととする。なお、人巻所収の四十二首、天巻所収の四十九首、地巻所収の三十首が、それぞれ興善寺本所収詩篇と共通している。

興善寺本と、『草堂詩集』の各巻とを対校する際、興善寺本の推敲後、『草堂詩集』の一卷が書かれたように見えるaの場合と、興善寺本が書かれたのち、『草堂詩集』の一卷が書かれ、そこで推敲が施されたように見えるbの場合とがある、これらa・bのケースからは、いずれも、興善寺本作成、推敲の後、『草堂詩集』の一卷が書かれたと判断できる。

a 興善寺本の書き込み字句と『草堂詩集』の本行字句とが一致する。

(例) 興33 一條鳥藤杖<sup>我有拄杖子</sup> ↓ 天10 我有拄杖子

b 興善寺本の本行字句(改変されていない)と、『草堂詩集』の本行字句(改変前)とが一致する。

(例) 興5 従事迦葉跡 ↓ 天13 従事迦葉跡<sup>古傳</sup>

ところが、逆に、次のc・dの如く、『草堂詩集』の一卷が先に書かれ、推敲の後、興善寺本が書かれたように見える箇所も散見される。

c 『草堂詩集』の書き込み字句と興善寺本の本行字句とが一致す

(例) 興46 維馬垂柳下 ↑ 天27 維馬垂柳下

d 『草堂詩集』の本行字句(改変されていない)と、興善寺本の

本行字句(改変前)とが一致する、

(例) 興16 千峯深閉門 ↑ 天3 千峯深閉門

『草堂詩集』の各巻ごとに、右のa b c dの項目別に事象数を検した。対象全詩篇の合計値のみを以下に掲げる。

地—興	人—興	天—興	a		b		c		d	
			計	1 2 3 4	計	1 2 3 4	計	1 2 3 4	計	1 2 3 4
7 0 1 0 6	7 0 0 0 7	4 2 0 0 2	67	44 0 3 20	137	98 22 3 14	43	21 5 8 9	7	0 1 0 6
			69	36 2 2 29	46	24 6 1 15	84	48 0 0 36	2	0 0 0 2

興善寺本は、『草堂詩集』の各巻に比べて、全体に書き込み字句が少ないので、a・dの事象数は僅かであり、顕著な差異は認められない。

次に、『草堂詩集』の方に書き込みのあるbとcの事象数を較べてみる。天巻と興善寺本については、bの合計が137、cが46で、bのパターンがcのそれを大きく上回っている。即ち興善寺本の字句が天巻の改変前の字句に一致する場合が多い。人巻と興善寺本については、bとcの全事象数を比較すると、bが69、cが84であり、cの事象数がbよりやや多いものの、その差は小さい。しかも、

興51の詩のみ、cの事象数が34と際だって多く、仮にこの一首を除くとbとcの大小関係は逆転してしまう。従ってこの数値から人巻と興善寺本との先後関係について何らかの傾向を読み取るとは危険である。地巻と興善寺本とは、bが67、cが43で、天巻の場合と同様、bの事象数がcのそれを上回る。即ち興善寺本の字句が、地巻の改変前の字句に一致する場合が多い。

以上を要するに、天巻・地巻については、興善寺本が書かれた後にそれが成立した可能性が高いことが、数字の上から窺える。けれども人巻と興善寺本との関係は判然としない。

そこで、次に、人巻の位置を確かめるため、人巻と興善寺本はいずれが天巻により近いテキストであるのかを調べてみよう。即ち、人巻と興善寺本との間で相異なる字句の一つ一つについて、それぞれどちらが天巻の字句と一致するかを調べる。但し、各稿本での字句改変箇所を除いた。その結果は以下の通りである。事象数は一字を単位とする。

人巻と興善寺本との間で相異なる字句のうち、

人巻と天巻とが一致する事象 117

興善寺本と天巻とが一致する事象 55

興善寺本と人巻との間で相異なる字句のうち、興善寺本が天巻と一致する場合よりも、人巻が天巻と一致する場合の方が顕著に高い傾向を示す。つまり、興善寺本よりも人巻の方が天巻により近いテキストである。ということは、人巻が書かれたのは興善寺本よりも後である可能性が高いと考えられる。

即ち、三者の関係は、

興善寺本(雑詩の部) ↓ 人巻 ↓ 天巻

ということになる。

#### 四 諸本の成立順序

以上の結果を総合すると、雑詩の部に關しては、

興善寺本（貫華系テキスト）↓人巻↓天巻↓流布本系テキスト

有題詩の部については、

興善寺本（貫華系テキスト）↓地巻↓流布本系テキスト

の順に成立したことが字句の上から明らかになる。

要するに、『草堂詩集』の各巻は貫華系テキストと流布本系テキストとの中間的な位置に置かれるべきテキストであると言える。

#### 五 諸本の成立時期

ここで、諸本の編まれた時期について、触れて置きたい。

まず、興善寺本には、友人有願亡き後の回想を述べる「苦思有願子」詩を収録している。有願は文化五年八月三日に没している。従つて、興善寺本の作成は文化五年八月以前には遡れない。

次に、『草堂詩集』地巻について、所収の「病中」第二首に「世上復無大忍子」（第三句）とあり、大忍は文化八年三月九日に没しているから、地巻の成立は早くとも文化八年三月以後でなければならぬ。

流布本の一系統である草庵本のうち、巻町郷土資料館蔵の『良寛禪師詩集』本文末尾に「文化十二乙亥梅月日書之」とあり、草庵本諸伝本に見られる記載としてはこれが最も古い。一方、もう一つの流布本である鈴木本は、「文化十三歲次丙子」とある鈴木文台の序をのせ、このときまでに一旦は編集し終わっていたと考えられる。

編者が異なる流布本のいずれもが、文化十二〜十三年までには編集されていたことになる。従つて、これらが底本として用いた、良寛自筆の詩集（流布本系テキスト）は、どんなに遅くとも文化十二年梅月（四月または五月）までには書かれていなければならぬ。

『貫華』作成着手から流布本系テキストの成立までに要した実際の期間はずっと短かいと想像されるが、最大の幅を見積つて文化五年八月から同十二年五月の間ということが言える。

#### おわり

荒削りではあるが、良寛詩集稿本の諸本を成立順序に従つて位置づけた。統稿「良寛詩集系統序論」（下）では、今回詳述できなかった二つの流布本について、検討する予定である。それを以て、良寛詩集の系統についての概括的な考察を終えるが、次なる取り組みとしての詩集内部の検討、個々の作品の検討を通しながら、本稿での諸本の位置づけをさらに裏付けていきたい。

#### 註

(1) 「良寛詩集系統序論（上）」——自筆稿本『草堂詩集』について『国文学攷』一二五号（平成二年三月）

(2) 題簽には、「草堂集」とまず書かれ、その下に「貫華」と書かれ、「草堂集」の文字の上に見せ消ち状の筆跡が付けられている。

(3) 山岸瘦石筆写本に記された筆写者の奥書によると「此稿、麓興善寺所藏之良寛禪師手書詩稿。庚戌（明治四十三年）九月、偶地藏堂某賈人持來示余、々借覽數日、遂写二本、返之。

〔訓点引用者〕とあり、山岸筆写本が良寛自筆の稿本から直接写されたものであることが知られる。この写本が成されたのち、自筆原本は分解され散佚したという。蒲原宏「良寛の漢詩研究補遺——興善寺本『草堂集』について——」(『越佐の歴史と文化』八宮榮二先生古稀記念集、昭和六〇年)、並びに、原田勘平「良寛自筆詩稿について」(『墨美』二一〇号、昭和四六年五月)参照。

(4)『古美術』二八号(三彩社、昭和四四年一月)所載の図版でその全容が知られる。

(5)なお、近世期に流布した良寛詩集としては、写本の他、葦雲編『良寛道人遺稿』(慶応三年三月序)が版行されているが、同書の底本となったのは草庵本及び鈴木本であったと考えられ、そのテキストは流布本系写本と殆ど異なるところがないため、今回の考察からは除外する。

(6)東郷豊治氏は、草庵集(草庵本)と文台本(鈴木本)草堂集との字句の異同に着目し、前者のテキストにさらに推敲が施されたものが後者のテキストであると位置づけている(東郷豊治編著『良寛全集』下(昭和三四年)解説、一三頁)。だが、氏矚目の草庵集の伝本は誤写が甚だしく、両者の字句の異同はそれに起因したものが多く、詳しくは統稿にて述べたい。

(7)この点については、前稿にて、ひとつの解釈を呈示した。即ち、逆展りの改案がなされた場合があるということである。

(8)『貫華』に施された字句の書き込みが興善寺本の本行字句と一致する、というケースが多いことから、どちらかと言えば『貫華』の方がより早い段階の草稿という印象が持たれる。但し、

『貫華』に施された全ての書き込み字句が、興善寺本の本行字句に一致するわけではない。『貫華』の書き込み字句と全く同様の書き込みが興善寺本にもなされている場合も散見される。従って、興善寺本を『貫華』の再稿本と単純に位置づけることは出来ないが、少なくとも興善寺本が作成されるよりも早い段階に『貫華』は作成されたと考えられる。

(9)東郷豊治編著『良寛全集』下 解説 一三頁。

(10)このような錯綜の理由については、推敲途上で表現が揺れていることも一因ではないかと考えている。

(11)谷川敏朗・良寛全集刊行会編著『良寛伝記・年譜・文献目録』(昭和五六年) 二六九頁

(12)この詩の第三・四句に「自一逐逝波 于今十餘年」とあり、そのまま受け取れば有願の没後十数年後の感慨ということになるが、この年数は、或いはフィクションではないかとも疑われる。

(13)西郡久吾編述『北越偉人 沙門良寛全伝』(大正三年)一五五頁  
付記 本稿の一部を、平成二年広島大学国語国文学会秋季研究集会にて口頭発表した。席上御指導賜った先生方にお礼申し上げます。

なお、『良寛禪師詩集』の閲覧に際しては、巻町郷土資料館の石山与五栄門館長、また、谷川敏朗先生に御高配を賜った。興善寺本『草堂集』山岸瘦石筆写本の閲覧については、蒲原宏先生に御高配を賜るとともに、御高説を承った。成稿に際しては、米谷巖先生に懇切な御指導を賜った。以上、記して心より厚くお礼申し上げます。

— 広島大学大学院博士課程後期在学 —